

## 〈50周年記念号に寄せる〉 人文学研究所の思い出

伊坂青司

私が神奈川大学に赴任したのは1984年のことです。赴任早々に人文学研究所の所員になってまず驚いたのは、共同研究グループの多彩さと活動の活発さでした。大学院生時代には専門の蜻壺的な研究室内に閉じこもっていたので、人文学研究所のなかの専門分野を越えた研究活動が、信じられないほど風通しよく感じられたものでした。

当時はまだ人間科学部はなく、所員のほとんどは「雑居」とも言われた大所帯の外国語学部に属していました。それで、色んな先生と教授会でも顔を合わせ、また人文研の部屋に行けば、一緒にお茶を飲むことにもなります。自分と専門を異にする先生方から色んなお話を聴ける機会が日常的にあり、自ずと耳学問が豊かになっていきました。また複数の共同研究グループに属して、それぞれに密度の濃い活動に参加できたことが、自分の専門である哲学の着想にとっても大いに刺激になり、恵まれた研究環境のなかで論文の執筆もできたのです。

2003年から2期4年間、研究所長を務めさせていただきました。その間、共同研究グループの活動をサポートし、いっそう発展させることを第一の任務として位置づけました。その間活動していた共同研究グループの名前を挙げれば、「西洋文化の受容」「現代精神史におけるスペイン内戦の意義」「日中関係史」「文化のかたち」「自然観研究」「物語研究」「ポストコロニアル・スタディーズの冒険」「東アジア比較文化研究」「横浜研究」「色彩語の社会言語学的研究」「ジェンダー・ポリティクスのかげ」（順不同）など、実に多彩です。それらのグループが共同研究の成果として叢書を刊行するにあたっては、グループ間で順番の調整をしなければならないほどでした。

また第二に、国際シンポジウムの開催を対外的な学術交流活動の重要な柱として位置づけました。人文学研究所主催で海外からゲストを招待することもあれば、また海外の国際シンポジウムに参加することもあり、国際的な学術交流を継続・発展させることができたと思っています。そうしたことが可能であったのも、それまでの活動の蓄積と関係する先生方のご協力に支えられてのことです。

本学で開催された国際シンポジウム「アジアのポップカルチャーと日本」は、若い世代の研究者によって発案・企画されました。報告や討論では、中国（香港、上海）や韓国などアジアにおけるポップカルチャーが、日本の漫画やアニメといった大衆文化から影響を受けていること、また韓国の韓流ドラマが日本でも受容されるなど、アジアにおける大衆文化を介した相互の文化交流について活発に論じられました。また浙江工商大学で開催された国際シンポジウム「道教と日本文化」には、日本と中国、さらに欧米から100名以上の研究者が集い、人文学研究所からは私を含めて4名が参加しました。シンポジウムは、道教が日本にもたらした影響を歴史・文学・宗教・芸術といった分野で検証するもので、シンポジウムの後には道教寺院の見学も組まれていて、大変興味深いものでした。中国との国際交流は、人文学研究所と杭州大学（現在の浙江大学）日本文化研究所との、関係する諸先生方の長きにわたる交流を基礎にしたものです。その後も、共同研究グループ「横浜研究会」の企画による国際シンポジウム「外国籍住民との共生社会の創造」が開催されたり、共同研究グループを母体にした大学の奨励研究グループ「表象としての〈日本〉—国際日本学の新展開—」が国際的な研究調査活動を行うなど、人文学研究

所の活動を拓げていただきました。

こうしてみますと、私が所長を務めさせていただいた人文学研究所の活動は、共同研究グループやそれにつながる学内外の研究者との交流によってこそ支えられていたことがよく分かります。そして4年に渡って、常任委員の先生方の支えがなければ、非力な私には任期を全うすることなどできなかったものと、改めて感謝の気持ちで一杯です。